

エゾサンショウウオ成体の 防御姿勢の一例

徳田龍弘

野生のエゾサンショウウオ *Hynobius retardatus* で防御目的と思われる行動を確認したので報告する。

2012年9月24日19時51分に札幌市南区定山渓(N42.59423, E141.05511)の路上を徘徊するエゾサンショウウオを発見した。天気は曇天で、雨上がりだったので道路は濡れていた。気温は11℃だった。環境は山地のアスファルト道で傍らを白井川が流れている。

見つけた個体はメスで全長109mmであった。体色は背面が薄い褐色で腹面が薄い黄色、尾の背側には黄条が見られた。(図1)

発見時は運転中だったため、車を止めLEDライトで照らしながらエゾサンショウウオの正面に回ったところ、尾を持ち上げる行動が見られた。尾は長時間持ち上げることはなく、徐々に垂れていったが、筆者がライトを動かしたり、上から掴む素振りを見せると、再び尾を持ち上げ



図1. 見つかった個体(メス)

た。(図2)尾の振り上げを期待して何度かライトや手を動かしたが、徐々に尾を持ち上げなくなり、逃げるようになった。最も尾が持ち上がった時でも、尾先は完全に持ち上がらず、全体像は弧形を示した。(図3)

捕獲して雌雄確認後に、自宅で一日保管し、9月25日に捕獲場所でリリースする際、再び個体の撮影をした。個体の体色は9月24日時とは少し変化し、背面が暗色が強くなり腹面の黄色は色を失い白くなっている。尾の背面の黄条は変わらず黄色かった。

道路が乾いていたため、エゾサンショウウオの移動に支障が起こらないように道路を霧吹きで湿らせた。その際エゾサンショウウオに霧吹きの水がかかったのだが、その際に再び尾を持ち上げる行動を示し、(図4)数回霧吹きをふりかけないと持ち上げたまま尾を左右に振る行動を2往復程度示した。(図5)その後数回、霧吹き



図2. 尾を持ち上げ防御姿勢をとる



図3. 最も持ち上げても尾は常に弧形



図4. 霧吹きで尾上げが誘発された



図5. 尾を左右に振る

をかけると反応して尾を上げたり振ったりしたが、やめると徐々に尾を下ろし、逃げまわるようになった。一度逃げまわるようになった後は尾を上げる行動をしなくなった。尾を持ち上げたり、振っている間は歩きまわるなどの行動は行わなかった。

外敵に襲われた際、有尾類は様々な姿勢をとることが知られている。持田(2009)によればトウキョウサンショウウオ *H. tokyoensis* やカスミサンショウウオ *H. nebulosus* で外敵が近づいたり、接触するとその尾を左右にふるTail-Lash型と呼ばれる防御行動を示すことが確認されている。また徳永(2011)はカスミサンショウウオで尾を立てる行動を観察し、外敵に尾振りを示すことで防御行動としているのだろうと考察している。一方で宇都宮ら(1996)は著作内でカスミサンショウウオが尾を立てる様子を威嚇と表現している。

これまで、著者はエゾサンショウウオの撮影や捕獲を相当数行なってきたが、尾を持ち上げる行動を確認したのは初めてだった。頻繁に行う行動ではないと思われるが、この行動を誘発する感覚として視覚および触覚が独立して関係している可能性があると思われた。9月24日の行動時は人間が目の前に立ったり、ライトで視

覚が刺激されたと思われるが、エゾサンショウウオに触ることはなかった。9月25日の行動時は霧吹きの水の粒子が体に触れ、触覚が刺激されたと思われるが、人間が目の前で大きく動いたり、ライトを直接当てるなどの行動は差し控えていた。

持田(2009)をもとにエゾサンショウウオの行動を分析するにTail-lash型の防御姿勢であったと思われる。またこの行動は逃げる行動に入ると全く確認されなくなった。一度逃げる姿勢に入ると逃げ続けようとする努力を優先させるため、防御姿勢を取らなくなる可能性がある。

引用文献

- 持田浩治. 2009. 有尾類の体色の多様性と機能. 爬虫両生類学会報 2009(2) : 160-169.
- 徳永浩之. 2011. カスミサンショウウオの尾立て行動の一例観察. 平成22(2010)年度 豊田ホタルの里ミュージアム研究報告書 (3):99-101.
- 宇都宮妙子・宇都宮泰明・大川博志・岡田純・内藤順一. 1996. カスミサンショウウオ(低地型). p.22-27. 比婆科学教育振興会(編) 広島県の両生・爬虫類. 中国新聞社. 広島.

(061-2303 北海道札幌市南区定山渓温泉西2丁目45-1-306 ばいかだWILD-PHOTO)